

土居征夫監修「世界のための日本のこころ その源流を探り未来を共創する～自ら学ぶための15の視点～」かまくら春秋社 2021年4月30日刊を読む

「日本のこころ」の源流の再確認とその世界に果たす役割

1. はじめに

- (1) コロナ後の世界のメガトレンドは、政治経済の面でも、技術トレンドの面でも、また、地球環境の面でも、時代を画する変革によりその構造が一新することが必至と思われます。世界から日本への期待が高まっている中で、最も対応に逡巡しているのが私たち日本人自身ではないかと考えます。若い世代の生きる自信の源となる自己肯定感は低いままです。
- (2) 「不易と流行」と言われるように、根無し草のように「流行」を追うのではなく、自らの伝統(不易)の要素を再確認し、確信をもって、その上に新潮流(流行)を把握して、確固とした「創造」につなげていくことが必要です。
- (3) 今後、私たちは「日本のこころ」の源流にある以下のような諸要素を再確認するとともに、その基礎の上に、コロナ後の世界に向けた日本初の想像(ビジョン)の共創とその具現化に向けて、世代を超えた対話と学びの過程を通じて、さらに歩を進めていくことが必要と考えます。

2. 日本のこころ

- (1) 日本人は、独特の風土と恵まれた自然環境の中で、長い古代文明の時期(縄文期)を経て、豊かな精神文化(日本的霊性)を育んできました。それは世界に遍在するアニミズムの要素をもつ古神道となり、その上に仏教や儒教のエッセンスが習合し(取り入れられ)、自然観と美意識が豊かな「日本のこころ」を形成するものとなったと考えられます。
- (2) (「日本のこころ」は、さらに近現代にかけて西洋思想も取り入れ<習合し>、進化しつつあると考えられます)

3. その特徴

- (1) 人間のこころには、生命体としての生存本能や強い自己愛に向かう要素があると同時に、一方では他者や自然や環境全体を大事に思う利他心(慈悲心)も併せ備わっています。
- (2) 「日本のこころ」は、歴史上、前者が勝ち過ぎた対外戦争の一時期があったとしても、本来的には、後者の要素を強く持っており、利己心(小我)を超えて真・善・美(大我・真我)を希求し、世界・人類の全体最適を願うものであると考えられます。

4. 世界の危機に果たす役割

世界では、経済的、軍事的な羅権を求める動きが強くなっており、個人としても自己益の追求を第一とする考えが目立ち、社会の分断や格差の拡大、宗教・政治紛争の拡大、地球環境の破壊などの動きが急になっていますが、世界・人類の平和、共存、繁栄のために、全体の価値に常にこころを配る「日本のこころ」が果たす役割は極めて大きいと考えます。

5. 地球環境の保全

自然との共生を重視し、身心や環境の清浄を貴ぶ「日本のこころ」は、「人新世の時代」に破壊されつつある地球環境の保全に向けて、大きな貢献を果たしていく必要があります。

6. 思想・宗教・人種などの諸対立の包摂

諸対立を包摂する力を持つ「日本のこころ」は、世界の文化や政治、経済、宗教、人種等の対立を、破壊ではなく、新しい共栄の方向に導く役割を果たす必要があります。

7. より良い個人の生き方を求める

- (1) 日々の生活を大事にする「日本のこころ」は、「今」の時間を大事にし、日々の生活の秩序を整え、豊かにし、幸福なものに変えていく力があります。
- (2) 価値創造につながる新しい人間の働き方、生活の仕方の提案、生活の中で異質なものを共存させていく智慧の発揮などが期待されます。
- (3) 剣道、弓道、合気道などの武道は、勝ち負けを争うスポーツではなく、個々人の生き方を支える武士道精神による人間形成の道となっています。

8. 和の政治

- (1) 独特の風土と豊かな自然の中で、長い縄文時代を経て形成された、戦いの少ない和の政治は、仏教や儒教の思想も取り込んで聖徳太子の十七条の憲法に見られる律令国家の形となり、その後の武士道に裏打ちされた武家政治を経て、明治維新に到るまで、日本の国内政治の基調となつてつながっています。
- (2) 内戦の数は多かったとしても、多くの場合、敗者の生き残りを許し、その遺伝子、伝統、文化は、絶滅することなく、後代に生かされてきています。
- (3) 幕末の大政奉還の過程や明治国家の民主主義や代議制の採用も、西洋文明の影響によるばかりではなく、聖徳太子以来の和の政治の伝統が貫かれてきた結果ともいえます。

9. 和の文化

俳句や和歌などの日本文学、浮世絵などの日本画、彫刻や陶芸品・工芸品、能や文楽、茶の湯などの芸事、和食文化、和様建築などの日本文化は、その裏にある「日本のこころ」の顕現として、世界の文化の多様性に貢献するものといえます。

10. 和の産業・経済

- (1) 日本の産業・経済を支えるエートスは、士魂(武士道)経営(個の主体性と自己犠牲を厭わない全体価値追求のバランス)、モノづくりの精神、三方良しの商業道徳、ボトムアップの主体的取り組みなどであり、鎌倉時代の宗教改革も影響して、それ以来今日の産業にまでつながっているものがあります。
- (2) SDGs 経営が求められている今日、世界の産業は株主第一主義からすべてのステークホルダー(関係者)への貢献に舵を切り替える必要があります、本来の日本型経営に見られる公益資本主義(公益と私益のバランス)こそ、向かうべき方向ではないでしょうか。

11. 日本語を生かした世界への貢献

- (1) 大和言葉は(例えばタタミゼ効果に見られるように)「日本のこころ」と一体不可分の言語であり、日本のこころの文化が世界の多様性を支える役割が大きいとするならば、教育や社会の取り組みの中で、日本語の豊かさは伝承され、普及され、保護されなければならないと考えます。
- (2) 日本語(国語)教育の在り方についても、読まれるべき言葉の伝承が重要であり、話し言葉の音を書きあらわした書き言葉中心(「表音主義」重視)の戦後教育を大きく改め、「読む国語」、日本近代文学などを読みつぎ、文化を読みつぐ国語教育の重視が必要ではないでしょうか。
- (3) 同時に世界とのコミュニケーションのために日本人が世界語(英語)を学ぶ必要性が拡大していますが、他方でグローバルな日本語の存在意義はますます高まっており、外国人にとって学びやすい日本語教育のあり方もさらに改善が求められます。

12. 日本型リベラルアーツの再構築に向けて

- (1) 世界は文明崩壊のリスクを高めつつあり、今後の人類は人間のあり方を極める「統合智」を発揮して、AIの力を道具として使って危機を克服する必要があります。
- (2) そのために統合智をもたらすリベラルアーツ教育がますます重要となっており、世界ではその方向への改革が進みつつありますが、日本ではこのような潮流に大きく遅れています。
- (3) とくに官民のリーダー層には、専門人材に加えていわゆる「人物」が必要となり、「日本のこころ」を体現したリーダー養成は喫緊の課題と考えられます。
- (4) そのためにも教育改革の方向として、デジタル×AIのための理系教育にとどまらず、日本型リベラルアーツ教育の再構築が待ったなしの状況にあると考えます。

13. 人工知能(AI)の時代に果たす「日本のこころ」の役割

- (1) 人工知能(AI)社会が高度化すればするほど、リベラルアーツ的な人間力がそれに付加されなければなりません。新しい価値を生み出すイノベーションのためには、実践智と感性・直観力を育てる必要があります。東洋哲学や「日本のこころ」が果たす役割は大きいと思われます。
- (2) 日本社会の構成員のすべてにとって、デジタル×AIの時代を幸せで豊かなものにするためにも、日本型リベラルアーツ教育により「日本のこころ」を再確認する学びの過程が必要と考えます。
- (3) 新構想のビジョンは、新時代を担う人たちにより、単なる作文ではなく、具体的な実践を伴う提案として、構想され、行動となり、内外に示される必要があります。
- (4) 日本の国民にとっては、勇気をもって生きる力をあたえるもの、世界のためには、ともに歩む人類社会のより良い姿として共有できる価値と、目指すべき方向を示すものでなければなりません。
- (5) 「日本のこころ」の源流を再確認し、その世界に果たす役割とあり方を考え、あらためて自己とは何か、世界とは何かを、多面的な座標軸で見つめ直し、テーマを定めて日本発の新構想のビジョンを考えてみましょう。

<コメント>

2年間の活動の成果として「世界のための日本のこころセンター」がコロナ禍の中に刊行した本書は、正に希望の光といえます。日本型リベラルアーツとは何かを知り、じっくりと腰を落ち着けてものごとを考えるのには絶好の著書と確信いたします。是非、御一読ください。

— 2021年6月10日林明夫記 —